

東大大学院教授 溝口 勝さん (58)

再生の岐路 18知事選

私の視点⑥

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故後、県外から専門家や学生、ボランティアらが被災地に入り、住民と共に再生の道を探っている。2021年3月で復興期間が終了した後、国の予算の大幅減が予想されるが、課題を解決するためには被災地内外の交流や連携がますます重要になる。11年6月からほぼ毎週末、学生らと飯館村に通い続ける東大大学院農学生命科学研究科の溝口勝教授(58)に話を聞いた。

【聞き手・尾崎修二】

と、新たに弘前や三重、農作物から国の基準値を佐賀などの他大学と連携 超える放射性物質が検出し、遠方の学生も参加できるとかという状況ではある教育研究プログラ

若者の交流や挑戦 活発に

若い世代が積極的に働くや素朴な郷土料理、福島に驚きます。都会の生活に挑戦できる環境を整える必要があります。私もICT(情報通信技術)を活用したスマート農業の導入など、協力を拡大開放地にするなど思い切った振興策を実行してほしいですね。

〓〓〓

私は飯館村で、シニア世代の村民やボランティアらが設立したNPO法人「ふくしま再生の会」に参加し、田畑や森林に降った放射性物質の調査や、農家自らが実行できる農地除染の技術開発をしてきました。

2012年度から講義の二環などで農学部や生らるるに連れて来ています。全国の学生が現場を見る機会を増やそうと、新たに弘前や三重、農作物から国の基準値を佐賀などの他大学と連携 超える放射性物質が検出し、遠方の学生も参加できるとかという状況ではある教育研究プログラ



みぞぐち・まさる 1960年、栃木県大田原市の農家に生まれる。三重大助手、東大助教授、内閣府技官などを経て現職。認定NPO法人「ふくしま再生の会」副理事長。専門は農業土壌物理学。原発事故関連の発表資料は研究室のサイト「みぞらほ」にアップしている。